



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

2023/01/19

日本現代史シリーズ #4

—なぜ日本はアメリカに戦争を挑んだのか?—

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。私は昨年 11 月、家内と 2 人でハワイに行きました。ハワイに住んでいる日本人の皆さんに、聖書のメッセージをするためです。



ある日、友人の家のディナーに招かれました。

夕食の前に辺りを散歩し、5 分ほど歩くと小高い丘に出たのですが、その丘の上に日本料理の料亭 “夏の家 (なつのや)” がありました。

この料亭こそ、真珠湾攻撃の直前まで、日本人スパイが根拠地として使った料亭です。

当時 日本海軍に吉川猛夫 (よしかわ たけお/1912-1993) という大尉がいました。

彼は日本人スパイでした。英語が非常に堪能だったのです。

この料亭の 2 階からは、真珠湾を一望することができます。

今 この 2 階には、彼が使った望遠鏡がそのまま設置されているようです。

彼からの情報を基に、日本は真珠湾攻撃に踏み切りました。

1941 年 (昭和 16 年) 現地時間 12 月 7 日のことです。これをもって日米戦争が始まったのです。

当時、日本の石油の 7 割はアメリカから輸入していたんですね。

日本には連合艦隊がありましたが、戦艦も軍艦もゼロ戦も、石油がなければただの鉄の塊です。全く動かないわけですよ。



大提督だった山本五十六 (やまもと いそろく/1884-1943) は頭脳明晰でしたが、戦争の前に、「水から石油が出来る」というデマの話に騙されてしまうということもあったんです。それくらい、たまらなく石油が欲しかったんですね。

その石油の 7 割をアメリカに依存していました。石油だけでなく、鉄くずや色々なジャンルでアメリカに依存した 工業大国の大日本帝国だったのです。

その日本が、なぜアメリカに先制攻撃をしたのでしょうか。



この戦争が始まるちょうど 10 年前に満州事変がありました。日本は中国の東北部に満州という国を造ります。傀儡 (かいらい) 国家ですよ。

満州と中国の国民政府との間に対立があって、戦争が長引いて行きます。

アメリカ・イギリスが国民政府に武器を支援し、日本軍の犠牲者が増大していく。

この日中戦争 (当時は支那 (シナ) 事変と言いましたが) を解決するには、国民政府に武器支援をしているアメリカ・イギリスの手を引かせなければならない。

そうしない限り、この戦争は終わらない。それで、アメリカとの戦争に踏み切った。  
これが一般的な説明です。ですが、私は前々から、どうも腑に落ちない。

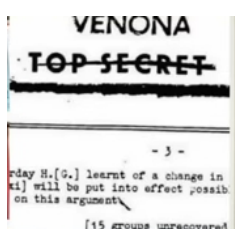
中国という権益を巡って、日本とアメリカ・イギリスの欧米が対立した、衝突したという一面は  
もちろんありますよ。

もちろんあるんですけど、日中戦争泥沼状態で、もういい加減消耗しているところに、尚且つ、  
戦争を終わらせるために、世界最強国のアメリカとまた戦争を付け加えてやっていくという発想、  
おかしくないですか。どうも解せない。納得できない。

実はこの日中戦争には、中国を巡る日米の対立以外に、目に見えない大きな力が働いていたんで  
すね。それがソ連の工作でした。



当時のアメリカ大統領はルーズベルト大統領（1882-1945）でしたが、その政  
権の中に、約 200 人のソ連のスパイが入り込んでいたと言われてい  
ます。  
これらのことが明らかになったのはヴェノナ文書のおかげです。



以前もお話ししましたが、ヴェノナ文書は、アメリカ国内のソ連のスパイが  
本国に送った秘密電報を傍受して解読したものです。

当時の日本は、アメリカと事を構えるつもりは全くありませんでした。  
それは自殺行為であることが分かり切っていたからです。

また、アメリカ側も日本と戦うつもりはなかったのです。

そもそもルーズベルト大統領は、第二次世界大戦に参戦しないことを公約に掲げて当選した大統  
領なんですよ。

それに、アメリカ陸軍参謀総長のマーシャルは日米和平を願っている人でした。

海軍作戦部長のハロルド・クラークも、日本と戦争する準備は出来ていないということで、日米  
和平を求めていたんです。作戦部長は海軍の最高位ですよ。

つまり、アメリカ軍部は陸海両方が、日米開戦は良くないと反対してたんです。

いつかはナチスドイツと事を構えるかもしれない。それについては腹積もりがありました。

しかし、日本と戦争するつもりはまるでなかった。

そんなことを考えているのは、アメリカの中にいなかったんです。



ところが、ルーズベルト政権の財務省 実質ナンバー 2 のハリー・デクスター・ホ  
ワイト（1892-1948）はソ連のスパイでした。

彼は日米和平工作を徹底的に邪魔します。彼こそが、日米和平交渉を決裂させ、  
戦争を決定的にしたハル・ノートの原案を書いた人物なんです。

ハル・ノートは、日本側がそれを読んだ時、最後通牒だとみなして「戦争やむなし」となったも  
のです。内容をひと言で分かりやすく言うと、「日本は明治維新以降の戦争で得たすべての権益  
を手放して、明治時代の日本に戻れ！ 明治維新当時の日本に戻れ！」

これをアメリカで言うなら、現在 50 の州がありますが、「建国した時の 13 州に戻れ。残りの 37 州は独立させて手放しなさい」ということですよ。  
もし、そんなことをアメリカが言われたら「ハイ、そうですか」と呑みますか。

後に極東軍事裁判（東京裁判）で、インドの弁護士であるパール判事が日本側を弁護しました。その時、アメリカの政治家の言葉を引用して、こう言ったんです。  
「『こんな最後通牒を突き付けられたら、ルクセンブルクやモナコでも立ち上がるに違いない』と、アメリカの政治家も言ってますよね。」

それくらいムチャクチャな最後通牒。日本が絶対に妥協できない、これを呑んだら国として成り立たない、というような最後通牒をバンと出して来たので、やむなく戦争に入って行かざるを得なくなったのです。

この最後通牒を書いたのがホワイトなんです。  
和平交渉が締結される直前まで行くのですが、その情報を掴んだホワイトが、それを全部ぶっ潰して、戦争に持っていくためにルーズベルト大統領に直訴したんですね。

ところで、ホワイトにハル・ノートの原案となるものを提案している人物がいました。  
ソ連の秘密警察 NKVD（エヌカーヴェーデー）のアメリカ部トップのヴィタリー・パブロフです。  
NKVD はソ連国内の反革命分子の逮捕・尋問・処刑・スパイ摘発などをやっていました。  
後に組織改編されて、泣く子も黙る KGB（カーゲーバー）になるんです。KGB の母体が NKVD。  
そのアメリカ担当の最高責任者がヴィタリー・パブロフ。  
彼はアメリカに来てホワイトに会い、指令を出しています。

1995 年、「今ならもう言えるだろう」と、ホワイトがソ連の手先だったことをソ連の雑誌に全部暴露したんですね。ホワイトがソ連のスパイだったのは間違いないことです。

さて、この作戦は見事に成功し、遂に日本は戦争を選択せざるを得なくなってしまいました。  
この日米戦争で、日本側は 300 万人の犠牲者を出します。  
2 発の原爆を食らい、日本の主な大都市は米軍の無差別殺戮攻撃（絨毯爆撃）によって、大勢の人々の命が亡くなったわけです。アメリカ側も 29 万人の犠牲者が出ました。

この戦争は、しなくてもよい戦争だったのです。しなくて済む寸前まで事が運んでいました。  
その和平交渉をギリギリのところまで食い止めて決裂させ、戦争せざるを得ない状況に日本を追い込むために、アメリカの中枢部に入り込んで好戦的な方向に仕向けて来た、そのカギはホワイトだったのです。  
ホワイトはソ連の工作機関の人物です。正式なアメリカ共産党のメンバーではありません。  
しかし、れっきとしたソ連のスパイとして活動したのです。

その後、ホワイトはどうなったでしょう。  
戦争が終わって 3 年後の 1948 年夏、アメリカの下院議会で非米活動委員会が開かれました。  
非米活動委員会は、戦争中、アメリカに対してスパイ活動した人々を摘発する目的で作られた特別委員会です。

その席で、ソ連のスパイだったウィテカー・チェンバースが共産党を抜け、自分がアメリカ国内でソ連の手先としてどんな活動をしてきたかを、洗いざらい喋りまくったんですね。彼はハリー・デクスター・ホワイトもソ連の手先として働いていたことを告白し、証言しました。

そこで、下院の特別委員会はホワイトを呼び出しましたが、彼はスパイであることを明確に否定。その3日後、彼はニューハンプシャーの自宅で、心臓麻痺で発見されます。それは薬物による心臓麻痺でした。自殺です。生き長らえて、自分がやったことを洗いざらい知られる前に、自ら口封じをしたのです。

この工作がなければ、日米戦争はなかったかもしれない。私はなかったと考えています。もしなかったら、あれほどの酷い犠牲を払うこともなかったでしょう。

私たちは戦勝国の歴史化に基いて、日本の近代史を学んで来たのではないかと思うんですね。つまり、“大日本帝国は非常に好戦的な軍国主義の国で、この軍国主義の行く手を阻む民主主義国家に対して戦争を仕掛け、世界制覇を目論んでいる国である。”  
そういう国だということを書いているのがポツダム宣言ですよ。  
日本はそれを受け入れたわけですね。だから、それに基づいた歴史化を学んで来たのです。

でも、“日本は戦争したくてアメリカに突っかかって行った”というのは、それは違う。どう考えてもおかしなことです。腑に落ちないことです。その腑に落ちなかった 今まで隠されていたことが、秘密電報の解読によって明らかになっています。

歴史はそろそろ“書き直されなければならない”ときに来ているのではないのでしょうか。少なくとも、私たちはその影響を受けているし、また、受け続けている。そのことを続きの動画で紹介しますので、よろしければご覧いただきたいと思います。

チャンネル登録もよろしくお願いします。  
ではまた、ごうちゃんねるでお会いしましょう。さよなら！